



Book Review

評者:池西静江 Office Kyo-Shien 代表

文化人類学[カレッジ版] 第4版

編集:波平恵美子/定価:2530円(2300円+税10%)

発行:医学書院/TEL:03-3817-5650

※本書は「系統看護学講座」同タイトルの装丁を改めたものです。



「文化人類学」が教えてくれる、看護の新たな視点

これまで、看護学、教育学を中心として学習してきた筆者にとって、一言でいうと「おもしろい」「こんな考えもあるのだ」という新しい発見がいっぱいの書籍であった。

過去に波平先生の講演を何度か聴講する機会があり、文化人類学に興味をもったものの、自身の怠慢で、しっかり書籍をひもとくことがなかった。このたび、カリキュラム編成作業中に『文化人類学[カレッジ版] 第4版』を読んでみて、看護基礎教育の基礎分野に取り入れたいと思った。それは、前述したような新しい発見とともに、看護につながる大切な考え方を見いだすことができたためである。

筆者は看護を「人々の暮らし(生活)と健康(生命)の両者を護る活動」とであると看護学生に伝えている。看護基礎教育においては、このたびの指定規則の改正で「在宅看護論」が「地域・在宅看護論」へと名称が変わり、地域での「暮らし」と「健康」を支える看護がクローズアップされている。これから看護師は、医学的知識をもとに「健康(生命)」を支える役割を果たすとともに、「暮らし(生活)」を支える役割をこれまで以上に果たしていく必要がある。

地域での暮らしを支援する看護の内容は、入院患者の生活の援助と同じではない。入院患者は治療に専念するために、ある意味、ふだんの「暮らし」を捨てて入院生活を送っている。そのため、地域での「暮ら

し」や「生きていくこと」を支援する活動には、これまでと異なる学習が必要だと考えている。

本書に、人間として生きることと文化について、「『文化』を抜きにして生きていくことなど想像できない」とある。はじめはその意味を理解できなかったが、本書を読み進めるなかで、「暮らし」「生きていくこと」を支援する看護には「文化」の理解が不可欠であることを実感した。

また本書には、健康について「健康とはその文化に生きる人々の日常生活に即したとらえ方として認識されている」、病気については「人間の身体に生じる不調には文化をこえた類似点があるかもしれない。しかし、その精神的な苦悩を、どこで、どのように表現するのかはあくまで文化的な現象である」と記されている。筆者は「文化をこえた類似点」に気づくためには、医学・看護学の普遍的な知識の学習が必要であると受け止めた。同時に、看護が健康問題によって生じる人間の反応を中心に扱うとするなら、病気によって生じる人々の苦悩を文化的現象ととらえる視点が必要であると理解した。

ほかにも本書は、人間存在、家族、社会、人生、健康と医療、いのち/生命と、まさに看護に直結する内容を取り扱っている。これまでの看護に新しい視点を与えるという意味で、多くの看護学生に学ぶ機会を与えたいと思う書籍である。